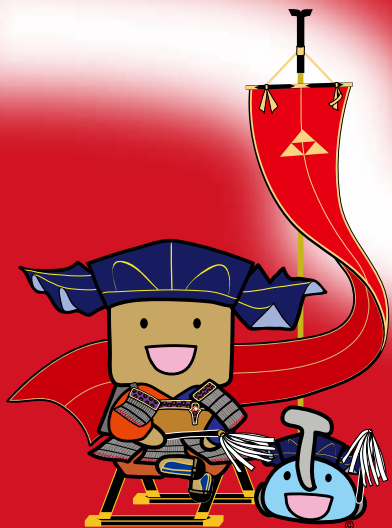


～東国における戦国時代の幕明け～

こう　こく　じ　じょう　あと

# 興国寺城跡



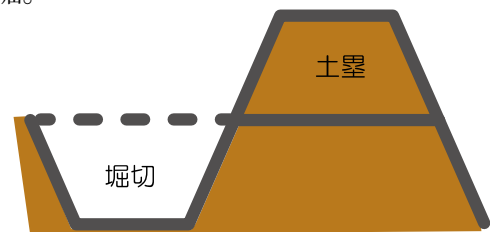
沼津市教育委員会  
沼津市文化財センター

# もくじ

I 興国寺城の位置	2
II 興国寺城の現況	2
III 興国寺城の歴史	4
IV 発掘調査でわかった興国寺城の変遷	7
発掘調査成果 1：築城以前	7
発掘調査成果 2：北条早雲の旗揚げと興国寺城	8
発掘調査成果 3：今川義元による本格普請	9
発掘調査成果 4：武田氏・徳川氏による城郭の巨大化	10
発掘調査成果 5：近世城郭への志向と廃城	11

## 城郭に関する専門用語

- こぐち 虎口・・・城の出入口の総称。小さく出入口を築くので小口とも呼ばれたのが語源とされる。
- まるうまだし 丸馬出・・・虎口の前面に三日月の形をした堀・横堀・土塁が組み合わさって構成される防御空間。
- どるい 土塁・・・土を盛って築いた土手。敵の侵入を拒む役割を持つ。
- ほりきり 堀切・・・尾根を遮断するため、等高線に対し直角に掘った堀。
- からぼり 空堀・・・水のない堀。底は通路に使用されることもある。
- くるわ 曲輪・・・人工的に造り出した平坦地のこと。



## 例言

1. 本書は、「北条早雲公顕彰 500 年記念事業」の講演会資料として作成しました。
2. 本書は、興国寺城跡整備調査委員会（委員長：服部英雄）の指導によって実施した興国寺城保存整備事業の成果の一部を公表するものです。
3. 本書は、沼津市教育委員会事務局文化振興課学芸員の木村聡と同課臨時嘱託の神山香織が編集・執筆しました。

## はじめに



興国寺城跡は、戦国時代から江戸時代初期にかけて駿河国と伊豆国の境目の地域を治めるための城郭じょうかくでした。現在の住所では沼津市北西部の根古屋ねごやや青野あおのに位置しています。戦国時代に関東一円を支配した小田原北条氏（以下、北条氏）の祖、北条早雲ほしゅうそう'un旗揚げの城としても知られており、平成7年には国指定史跡となりました。その後の追加部分も含めると指定面積は11万㎡を超えており、これは県内でも有数の規模となります。さらに平成29年には、公益財団法人日本城郭協会から続日本100名城に選定されました。こうした指定や認定からも興国寺城跡が沼津市だけではなく、日本が誇るべき文化遺産であることを示しているといえるでしょう。

沼津市教育委員会では昭和57年度の伝天守台の調査を皮切りとして、これまで興国寺城跡の全域で20回以上にわたって累計2万㎡を超える面積の発掘調査を行ってきました。そして平成31年3月には、これまで実施した古文書・絵図調査と発掘調査で判明した内容をまとめた『史跡興国寺城跡調査報

告書』を刊行しました。

本ガイドブックは、この報告書を要約したものとなりますが、一部内容を再構成しました。戦国時代の幕明けから江戸時代までの約100年間、興国寺城がどのような変遷へんせんをたどったのか、本書では主に文献史学と考古学で得られた知見からその実態に迫っていきます。



写真1 本丸に建てられた北条早雲碑



写真2 興国寺城跡全景（平成28年度撮影）

## I 興国寺城の位置

沼津市域は地形的に北部地域の愛鷹山<sup>あしたか</sup>を主とする山麓、西部地域の千本砂礫洲<sup>せんぽんさだくす</sup>とその背後に広がる浮島沼、中心部から東部地域にかけて広がる黄瀬川<sup>きせ</sup>扇状地、南部地域の海に迫った複雑な海岸線を有する地域の4つに分類されます。この中で興国寺城は北部地域の愛鷹山南麓に延びる尾根の先端部に築城されています（第1・2図）。

愛鷹山麓から富士山麓沿いにかけての集落は、山の「根」に分布することから「根方」と呼ばれ、集落を東西に結んで山裾を東西に横断する道は「根方街道」と通称されています。この根方街道は古代より富士市の旧吉原地区から三島・御殿場方面を結ぶ主要な幹線でした。また海岸沿いの千本砂礫洲上にも、古来から東西を結ぶ道が通じており、これは江戸時代に東海道として整備されました。また現在では、根方街道と東海道を南北に結ぶ通称「興国寺城通り」が通じていますが、かつてはこの道より少し西に「竹田道」と呼ばれる道も存在し、根方街道と東海道の2つの街道を結んでいました。

## II 興国寺城の現況

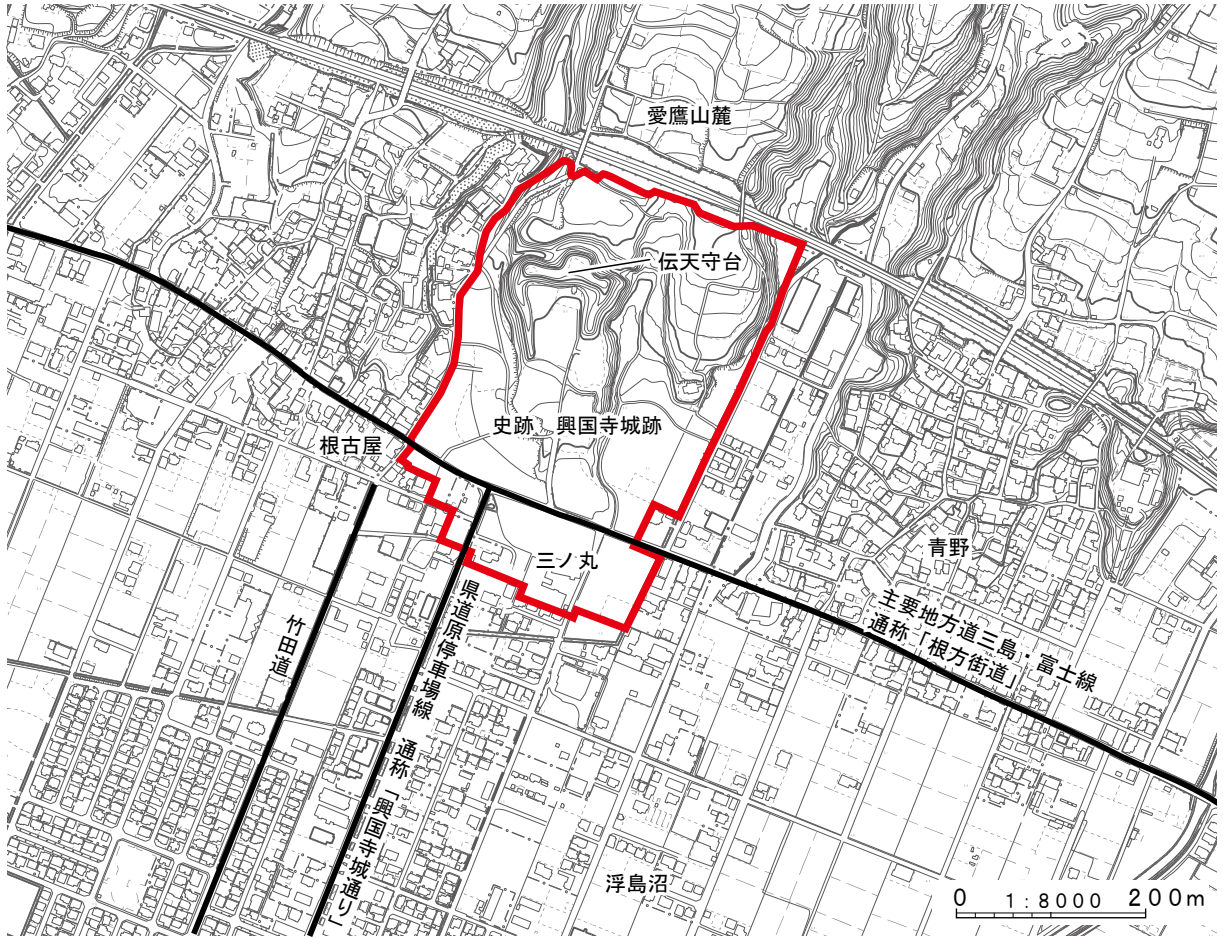
興国寺城跡が位置する愛鷹山麓には、活発な火山活動を続けた古期富士（小御岳火山）や箱根火山の火山灰が堆積して、厚いローム層が形成されています。このローム層は愛鷹ローム層と呼ばれ、興国寺城はこのローム層を切り盛りして城を造っています。

興国寺城跡は後世の改変を多く受けていますが、江戸時代前半には原型が成立したと考えられる城絵図には城内の曲輪<sup>くるわ</sup>の名称などが書かれています。現在も「本丸」などの城の中の名称は基本的に絵図史料に基づいていますが、これに記載の無い曲輪については沼津市教育委員会で新たに名称を与えています。ここでは現在の測量図と城絵図を比較しながら、城の曲輪配置を概観してみましょう（第3・4図）。

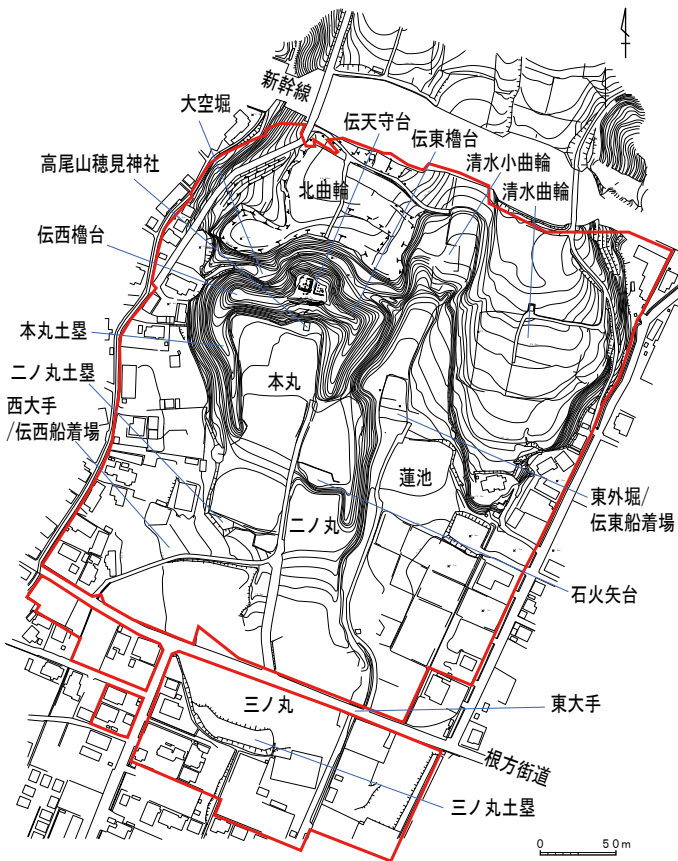
曲輪は北から「本丸」「二ノ丸」「三ノ丸」と直線的に配され、絵図からこれらが主要な曲輪群と考えられます。そして絵図には記載されていませんが、本丸の北側に北曲輪、東側の谷筋に清水小曲輪、そして更に東の尾根に清水曲輪が配されています。これに外堀を加えた範囲が現在国の史跡として指定さ



第1図 戦国時代末ごろの東駿河城郭分布図



第2図 興国寺城跡周辺地形図 (赤枠は指定範囲)



第3図 曲輪配置図 (赤枠は指定範囲)



第4図 駿州真国寺古城図 (国立国会図書館蔵)

れている城域です。なお、かつては北曲輪には、三日月の形をした堀が存在していましたが、新幹線建設によって破壊されてしまいました。また絵図には北曲輪よりも北側に堀もしくは道が描かれていますが、この存在は現況では確認することはできません。

城の主要部は絵図では黒く塗られた土塁に囲われており、この土塁は今もその多くが残存しています。また本丸東側の小さな曲輪には「カクシ口」と書かれており、この周辺は石火矢台とも地元には伝わっています。

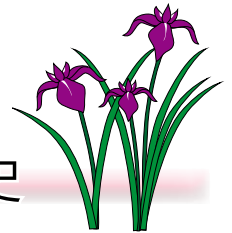
本丸は城の中心となる場所ですが、絵図にも建物の情報がありません。発掘調査でも門跡は見つかったものの、その他の建物跡は見つかっておらず、城内の建物がどのようなものであり、またそれらがどのように配置されていたのかは分かっていません。今後も調査が必要と考えています。

ただ本丸門跡を除いて城内で唯一建物の痕跡が確認できたのが、絵図において本丸の北側に「天守台」「石垣」「櫓台」と記されている場所です。天守台とあることから、天守閣が建っていたと想像したくなりますが、発掘調査では建物の基礎は検出されたものの、1点たりとも瓦は出土しませんでした。このことから、ここにあった建物は城の一番高いところにそびえる象徴的なものではあるものの、いわゆる瓦葺の荘厳な天守閣ではなかったと考えられます。そのため本地点はあくまで絵図に伝わっているという意味で伝天守台と呼称しています。

二ノ丸・三ノ丸も本丸と同じで、土塁や堀は絵図に描かれていても、建物配置まではわかりません。また三ノ丸土塁の形状は絵図と一致するものの、大きく土取りされて低くなっています。城地は後世の改変が激しく、かつての姿と今の姿との最大の変化は絵図において外堀の南側を回っている根方街道が、現在の三ノ丸の中を直線的に通過していることです。そのため、絵図において三ノ丸土塁南東に描かれている「大手口」は現在の根方街道（県道）の下と考えられます。

城の南方と両側に広がる低地は、1mも掘削すると水が湧き出る低湿地帯で、絵図には「蓮池」「深田足入」と表現されます。この湿地帯を興国寺城跡では天然の堀としていたようです。この東西に位置する天然の堀（西外堀・東外堀）には、それぞれ船着場があったと地元には伝わっており、詳細位置は

不明であるものの、この周辺を伝西船着場、伝東船着場と呼称しています。



### III 興国寺城の歴史

興国寺城の存在を最も古く示す史料は、江戸時代に記された『北条記』『今川記』といった軍記物や『今川家譜』のような家譜で、戦国時代に書かれたものは残されていません。そのため、その記述の真偽については注意を払う必要があるのですが、これらに基づけば、北条氏の祖である北条早雲は、室町幕府の申次衆（将軍の取次ぎを行う高官）を務めながら、姉北川殿の嫁いだ今川氏の家督争いにおいて、北川殿の息子、つまり早雲にとって甥である今川氏親を家督につけることに成功した功績から、富士郡下方十二郷と興国寺城を与えられたとされます。この段階では早雲は今川氏の縁者として、今川氏を補佐する立場でした。なお、余談となりますが、北条姓を名乗ったのは、彼の息子である氏綱以降で、早雲は自身のことを北条早雲と名乗ったことはありません。彼は伊勢氏の出身で、自らのことを伊勢新九郎盛時、のちには伊勢宗瑞と名乗りました。

そして明応2年（1493）興国寺城から、伊豆に居を構えていた堀越公方である足利茶々丸を攻めたと伝わります。早雲自身が幕府の高官であるとはいえ、茶々丸は11代将軍である足利義澄の異母兄であり、身分としては格上の人物です。したがって早雲の伊豆討ち入りは、身分の上の者を下の者が打ち破る、いわゆる「下剋上」を達成したことから、東国における戦国時代の幕明けとも評価されています。ただ近年の研究において、伊豆の討ち入りは早雲単独での動きではなく、中央の政治と連動した行動であったことが明らかになりつつあります。また討ち入りもその場で達成されたものではなく、茶々丸を討ち伊豆を平定するまで約6年かかったようです。

次に興国寺城が歴史に登場するのは、天文6年（1537）から始まる河東一乱以降のことです。河東一乱とは、今川氏親の息子である今川義元がこれまでの外交政策を転換し、甲斐国の武田信虎と同盟を結んだことに端を発する争いです。これにより、早

第1表 興国寺城関連年表

西 暦	和 暦	大 名	城主・城代	出来事
1487	文明 19			伊勢宗瑞、室町將軍足利義尚の申次衆に名が見える。
1487	長享元	今川・北条	伊勢宗瑞	伊勢宗瑞、今川氏親を当主に据え、富士郡下方十二郷と興国寺城を与えられる。
1491	延徳 3			堀越公方足利政知が没す。茶々丸が義母円満院と義弟潤童子を殺害。
1493	明応 2			伊勢宗瑞、伊豆国堀越御所に足利茶々丸を攻め、伊豆平定を開始。京都では明応の政変が起きる。
1498	明応 7			伊勢宗瑞、伊豆平定がなり、興国寺城から葦山城へ本拠を移す。
1515	永正 12			伊勢宗瑞、沼津妙海寺に諸公事等を免除する。
1537	天文 6			今川義元と武田信虎が同盟。義元、信虎の娘を正室に迎える。
1537	天文 6	北条		北条氏綱、河東侵攻。「(第1次)河東一乱」勃発。河東を北条が制圧。
			(青地飛驒)	(興国寺城主青地飛驒、武田に降伏する)
				(武田信虎、娘の化粧田として今川義元に興国寺城を渡す。)
1545	天文 14			今川義元・武田晴信、河東に侵攻し吉原を攻める。(第2次河東一乱)
1545	天文 14	今川		武田晴信、吉原を落とし、千本松、岡宮に陣をはる。河東は今川の勢力下となる。
1549	天文 18			今川義元、普請のため興国寺を真如寺に移し、寺領を安堵する。(興国寺城の普請)
1550	天文 19			今川義元、興国寺城の普請を検分する。
1552	天文 21			今川義元、秋山三郎の興国寺城普請の功を褒め、棟別銭などを免除し、高橋修理の同心とする(興国寺城普請)。
1552	天文 21			今川義元の娘が武田義信に嫁ぎ、翌年武田信玄娘と北条氏政の婚儀が整う。さらに翌年、北条氏康娘が今川氏真に嫁ぐ(甲相駿三国同盟なる)。
(1554)	(天文 23)			(北条氏康・氏政、河東に侵攻し、浮島ヶ原に陣をはる。)
1560	永禄 3			桶狭間の戦い。今川義元戦死。
1560	永禄 3			今川氏真、松井宗信の興国寺口での戦功や桶狭間での討ち死を子八郎に対して賞す。
1568	永禄 11	北条		武田信玄が駿河侵攻。北条氏康も駿河に進出し、興国寺城ほか河東地域を占領する。
1569	永禄 12			武田信玄が再度駿河侵攻。興国寺城などを攻めるが、大水のため八幡大菩薩の旗を捨て敗走。
1569	永禄 12		塀和氏統	塀和氏統、興国寺城主に任じられる。
1571	元亀 2			興国寺城に武田勢が侵入するも、塀和氏統らが奮戦し、撃退する。
1572	元亀 3	武田		武田と北条が和睦し、興国寺城を武田が受け取る。
	元亀頃		(保坂掃部)	穴山梅雪が麾下の保坂掃部に興国寺城を守らせる。
1577	天正 5		(向井正重)	向井正重が興国寺城を守る。
1579	天正 7			武田勝頼が三枚橋城を築城。武田と北条の関係が悪化する。
1580	天正 8			駿河湾海戦起きる。武田勝頼、浮島ヶ原を本陣とする。
1580	天正 8			穴山梅雪、興国寺城に天神ヶ尾砦の門を移築するなど、普請を行う。
1581	天正 9			興国寺城に北条家臣大藤政信の軍勢が攻め込む。
1582	天正 10	徳川		織田徳川連合軍が武田勝頼を攻め滅ぼす。
1582	天正 10		曾根昌世	織田信長、曾根昌世に興国寺城と河東一万貫を与え、徳川麾下とする。
1582	天正 10		牧野康成	本能寺の変。牧野康成の家臣稲垣長茂が興国寺城を守る。
1582	天正 10			天正壬午の乱。
1582	天正 10		松平清宗	松平清宗が興国寺城主となり、2000貫、与力50人が与えられる。
1583	天正 11			徳川家康が富士山作衆に興国寺城普請等以外の普請役を免除する(興国寺城の普請)。
1583	天正 11			松平家忠、長久保城を普請する。往路と復路に興国寺城に立ち寄る。
1584	天正 12			小牧長久手の合戦。松平清宗は家清と共に興国寺城を守る。
1585	天正 13			武川衆の人質が興国寺城に入る。武川衆は大久保忠世に属し戦功をあげる。
1589	天正 17			大地震で興国寺城の塀(と二階門)が破損する。
1590	天正 18			豊臣秀吉の小田原攻めが始まる。徳川家康、興国寺城に滞在する。
1590	天正 18			松平清宗は吉原を守り、山口直友が興国寺城を守る。
1590	天正 18			北条氏が滅び、徳川家康が関東へ移封。松平清宗親子は武蔵八幡山城1万石を与えられる。
1590	天正 18			関東移封のため、松平家忠の妻子が一時興国寺城に滞在する。
1590	天正 18	中村(豊臣)	河毛重次	中村一氏が駿河国を与えられ、河毛惣(宗)左衛門重次が城主となる。
1590	天正 18			河毛重次、大泉寺領地と桃沢神社地を安堵する。
1600	慶長 5			会津上杉征伐・関ヶ原の戦い。中村勢は東軍に参加。内藤信成・菅沼定仍が興国寺城を守る。
1601	慶長 6	天野(徳川)	天野康景	天野康景、五千石を加増され、合わせて1万石となり、興国寺城を与えられる。
1603	慶長 8			天野康景が大日不動(現、駿東郡長泉町)へ二石寄進する。
1603	慶長 8			天野康景が本宿村新井堰に十石付け置く。
1607	慶長 12			天野家臣が天領の農民を殺傷し、天野は小田原西念寺に蟄居(逐電)する。
1607	慶長 12			興国寺藩は除封。興国寺城は廃城となる。

雲以来の従属関係または友好関係にあった北条氏との関係が悪化したことで、早雲の息子である北条氏綱が駿河東部に出兵して乱は始まりました。戦況は当初北条方が優勢でしたが、最終的には武田の援軍を得た今川義元は河東地域の奪還に成功しました。こうして興国寺城周辺は今川氏によって治められることとなり、その今川義元によって興国寺城も本地域の拠点城郭として大規模に普請されました。このことが『今川義元判物写』として残されており、これが興国寺城に関する現存最古の一次史料（戦国時代当時に書かれたもの）となります。これには、興国寺という寺院を蓮光寺の境内に移し、その名前を真如寺と改称させたうえで、その跡地に城を普請したと書かれており、これが興国寺城の名称の由来とされています。

その後、今川氏・武田氏・北条氏による三国同盟が締結されたことで、興国寺城は今川氏支配が続きました。しかし、永禄11年（1568）に武田信玄が今川氏との同盟を破棄し、駿河国に侵攻すると再び東駿河は戦場となりました。早雲の孫である北条氏康は、今川氏の支援のために東駿河に出兵し、興国寺城をはじめ諸城を占領しました。これに対し武田信玄も数度東駿河に侵攻をしたため、拠点城郭であった興国寺城でも大規模な戦闘が起こっています。北条氏は塀和氏続らが奮戦し、興国寺城では武田軍を撃退しましたが、これ以外では蒲原城が落城するなど劣勢を強いられました。そして北条氏康が亡くなると後を継いだ息子の氏政は外交政策を転換し、武田信玄と和睦して駿河国から撤兵、興国寺城も武田氏に引き渡されることになりました。

武田氏支配のもと、しばらく当地には平穏が続きましたが、上杉謙信の後継者をめぐる御館の乱をきっかけとし、武田氏と北条氏との関係が再び悪化、武田勝頼は国境沿いに三枚橋城を築城して北条氏との対決に臨みました。この頃、同じ根方街道沿いの天神ヶ尾砦の門を興国寺城に移築するなど、興国寺城でも普請が行われていたことが記された史料が残っています。

北条氏との対決は一進一退でしたが、武田勝頼は西から織田・徳川連合軍の攻勢を受け、徐々に劣勢となっていきます。そして天正10年（1582）には武田氏は滅亡することとなりますが、この時、興国寺城に在城していた曾根昌世は、以前より織田信

長に通じており、戦後には駿河の所領と興国寺城を安堵されています。

同年、織田信長が本能寺の変で急死すると、徳川氏と北条氏の間で旧武田領をめぐった天正壬午の乱が勃発しました。武田氏滅亡後、興国寺城は徳川家康の家臣である牧野康成が守っていましたが、乱のころには松平清宗が城主となります。また三枚橋城にはこれまで諏訪原城（島田市）などで対武田氏との最前線を担ってきた徳川氏重臣の松井忠次（松平康親）が配置され、さらには長久保城の改修など軍事的緊迫はしばらく続いていくことになりました。

この戦いは徳川家康と北条氏政の会盟を経て、和睦となり、結果として興国寺城を含む駿東地域は、徳川氏が治め続けることになりました。そののち豊臣秀吉が北条氏政・氏直親子に対して宣戦布告すると、豊臣氏は徳川氏を従えて、大軍勢とともに街道を東に進み、これに従う諸将も興国寺城付近を通っています。

天正18年（1590）に北条氏が豊臣氏に敗れると徳川家康は関東に転封となり、代わって駿河国は豊臣氏の家臣である中村一氏が治めました。一氏は駿府を拠点として、三枚橋城に弟の中村一栄（氏次）、そして興国寺城に彼の重臣であった河毛重次を配しています。河毛時代の記録は少ないのですが、彼は武に秀でた武将であったようで、一氏の岸和田在城時代に対雑賀・根来衆との戦いにおいて軍功を多数あげていることがわかっています。

慶長5年（1600）、関ヶ原の戦いが起き、東軍が勝利すると、東軍に属した中村氏は伯耆国へ移封となりました。このことから興国寺城に新たに配されたのは、徳川家康家臣である天野康景でした。彼はここで興国寺藩1万石の大名となります。

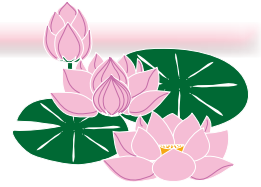
彼は家臣を大事にする人柄であったと伝わりますが、慶長12年（1607）、家臣による天領民の殺傷事件が起こると、子の康宗とともに城を捨てて出奔して、相模国西念寺に蟄居してしまいます。城主不在となったことから、藩は取り潰しとなり興国寺城は廃城、その後、城内は農地となっていきます。

早雲旗揚げから戦国時代を通じて拠点城郭であり続けた興国寺城は、波乱の歴史を経て、最後の城主の出奔という形で幕を下ろしたのです。





## IV 発掘調査でわかった興国寺城の変遷



### 発掘調査成果 1：築城以前

前章で見てきた通り、興国寺城は戦国時代から江戸時代初頭における駿東地域の拠点城郭であったことは間違いありません。これは、城地が愛鷹山南麓において比較的大きな尾根上にあること、さらに当時の主要街道の一つである根方街道を抑えたうえ、眼下に広がる浮島沼やその奥の東海道、さらには駿河湾や伊豆半島を見通すことができる立地であったことがその一因と考えられます。しかしそれは戦国時代になってからに限ったことではありません。その環境の良さからか、興国寺城の下層には、縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良時代・そして鎌倉時代の遺跡が複合的に存在しているのです。

縄文時代から奈良時代までの遺跡は、その大部分が興国寺城の築城・改修に伴って破壊されていますが、北曲輪では弥生時代の墓、清水曲輪では奈良時代の住居跡が見つかっています。特に北曲輪で見つかった方形周溝墓ほうけいしゅうこうぼと呼ばれる墓は弥生時代中期（約2千年前）のもので、これは沼津市内でも類例が少なく貴重なものです。北曲輪では最低でも3基の方形周溝墓がまとまって見つかっており、さらにお墓に供えられたと考えられる壺も出土しました。

平安時代の遺構遺物の出土はなく、この時期の利用は明らかではありませんが、鎌倉時代には再度この場所が使われるようになりました。明確な遺構は検出されず、詳細は分かりませんが、中国などで作られた輸入陶器などの高級品から渥美窯あつみ（愛知県）で焼かれた甕かめ、産地不明の内耳鍋ないじなべなどの日用品まで出土しています。

興国寺城周辺は、鎌倉時代頃は阿野荘あのしょうと呼ばれていて、源平の戦いの後には、源頼朝の異母弟となる阿野全成あのぜんじょうがこの地に領地を得ており、阿野全成親子のものと伝わる墓が井出大泉寺に残されています。戦国時代の阿野荘は、古文書などから富士市船津付近から沼津市の浮島・原・愛鷹・片浜地区の一部にかけて位置する広範な地域であったと考えられますが、もしかしたら阿野荘の運営に関わる人物が後の興国寺城となるこの場所にいたのかもしれない。



写真3 北曲輪で見つかった弥生時代の方形周溝墓



写真4 清水曲輪で見つかった奈良時代の住居跡

左の2つの石はカマドの袖石で周りに焼土が伴っています。またその右側には甕かめが潰れて出土しました。



写真5 鎌倉時代に位置づけられる出土遺物

## 発掘調査成果 2：▲北条早雲の旗揚げと興国寺城

文献史料による調査成果に基づけば、興国寺城が城としての機能を持ち始めたのは15世紀末の北条早雲（伊勢宗瑞）の旗揚げの時とされます。しかし近年の研究成果では、早雲旗揚げは当時の史料（一次史料といいます）には出てこず、「今川家譜」などの後世に書かれた書物にしか出てこないことから、早雲の旗揚げが事実かどうかを疑問視する説もあります。

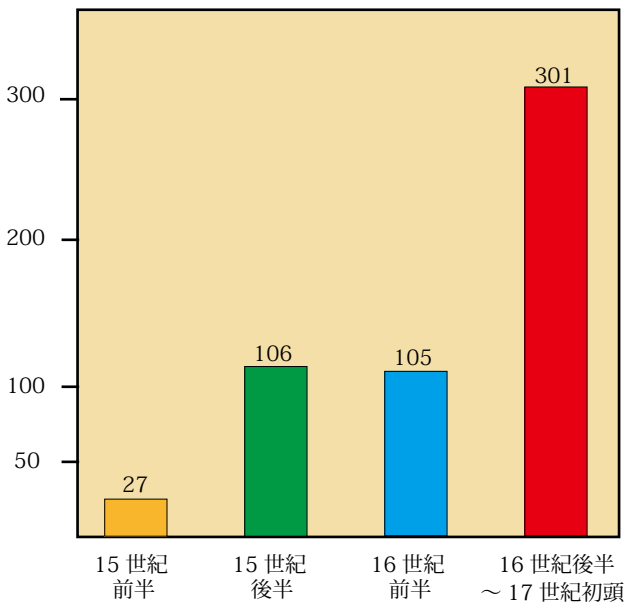
しかし発掘調査の整理を進めたところ、15世紀後半以前と以後では出土遺物の点数に大きな差があることが判明しました。第5図は興国寺城跡から出土した瀬戸美濃・志戸呂・初山の焼き物の出土数をカウントしたものです。確かに県内のいずれでも15世紀後半から瀬戸美濃製品の流通量は増加する傾向にあります。それを差し引いても興国寺城が15世紀後半から本格的に利用され始めたとするのは、このグラフからみても間違いのないでしょう。また瀬戸美濃製品の内訳には茶壺や仏具の花瓶や燭台、香炉などの日常雑器とは言えないものも含まれています。

ただし遺物は確認できたものの、15世紀後半の遺構はほぼ掘り下げることはできていません。これは、史跡整備の発掘調査であることも関わってきます。発掘調査ではより新しいほうから古いほうへ向かって

掘り下げていくのが基本ですが、そうすると古い遺構はそれよりも新しい遺構を破壊しなければ見ることはできません。早雲の旗揚げはこの城を語る上で重要な事項の一つですが、それと共に戦国時代から江戸時代初期にかけて、拠点城郭として機能し続けた姿もまた重要な事項です。そのため、発掘調査では17世紀初頭の姿を基本的に保存しつつ、一部のみ掘り下げを行っています。

そのような条件下ではありますが、興国寺城の中で最も古い遺構は、本丸ではなく根方街道沿いである三ノ丸で見つかっています。断片的な検出ではありますが、黄色のロームブロック土と黒色土を交互に積み重ねた「版築遺構」です。検出された高さは17世紀初頭の遺構検出面よりも約0.7 m下層であることからこの遺構が古いことがわかります。

版築遺構には東側に石列と溝が伴い、石列は南辺で西にL字に曲がっています。方形の基壇のようなものかもしれません。発掘している時は、早雲が入った「興国寺」の発見かとも考えましたが、お寺の基壇とするには造りは荒く、これが寺に關係する遺構とは断定するまでに至っていません。ですが、出土遺物は15世紀後半～末までのものに限定されることから、興国寺城の中でも最古級の遺構であることは間違いありません。



第5図 興国寺城跡出土遺物の時期別集計グラフ

15世紀後半以降の遺物の出土数が増加していることがわかります。



写真6 三ノ丸の版築遺構（北から撮影）

中央に黄色と黒色の互層が見え、その横には石列が伴っています。また奥の一段高いところに写る石組は17世紀の遺構です。

## 発掘調査成果 3：⊖ 今川義元による本格普請

天文6年(1537)に始まる河東一乱によって興国寺城周辺を含む河東地域は北条氏領から今川氏領になり、今川義元は天文18年(1549)に大規模に城を整備したと伝わります。それまで「寺」であった「興国寺」から本格的な「興国寺城」へと変わったと理解されますが、16世紀中葉頃の遺構は、根方街道沿いの三ノ丸と城内で最も標高の高い位置にある北曲輪で見つかっています。

三ノ丸で検出されたのは16世紀末頃の遺構の下から見つかった柱の穴です。まとめて62基が確認されました。幅1.4mとひときわ大きいものもありますが、大部分は検出面で幅0.3m、深さ0.2m程度の小さなものでした。一部は直線的に並ぶものもありますが、建物を構成するような配列にはなっておらず、その性格は明らかになっていません。出土遺物には16世紀前半の皿があり、先述の16世紀末頃の遺構の下からの検出という結果とも矛盾がないことから、この時期に掘られたものとして評価されます。

三ノ丸の柱穴群は城郭の遺構とは断言できるものではありませんが、北曲輪では曲輪を東西に横断し、最大幅は約6.0m、最大の深さは約2.7mを測る空堀が検出されました。これは確実に城の防御施設といってよいものです。さらにこの堀には、曲輪の東西端において、<sup>うね</sup>畝が伴っていることが特徴です。発掘当初は主に北条氏の城に見られる障子堀ではないかと考えましたが、曲輪西側の調査区を10m広げた結果、畝は1条だけにとどまることが確認されています。

また調査を進めたところ、興国寺城の中で最も古いこの堀は、人為的に埋め戻されて廃棄されていたことがわかりました。埋め戻された土の中から出土した遺物は16世紀中葉までに収まることから、この時期に城内では堀を埋め戻すほどの大きな改修が行われたことがわかります。また曲輪の西側ではその上層に2面の整地層が新たに造られ、そこでは焼土とかわらけが多量に出土したことから、埋め戻したのちに地鎮祭のような儀礼が行われたと考えられます。一方、曲輪の東側では、一度埋めた堀を再度掘り返して新たな堀が造られています。この堀には出土遺物がなかったことから、はっきりとした年

代は分かりませんが、城郭の最終段階を描いた絵図に描かれていない堀であることから、17世紀初頭には完全に廃棄されていたと想定され、したがってこの堀は16世紀中葉以後から17世紀初頭以前に位置づけられる堀と考えられます。

以上の2地点の成果から推測すると、16世紀中葉には街道沿いの諸施設が並び、それを山上から見通す城郭という構造が出来上がったと考えることができます。このことは文献記録に従えば今川義元の本格的な普請時期と合致することから非常に重要な成果であるといえます。



写真7 三ノ丸の柱穴群

黄色のローム層に灰色の穴が見えます。穴をすべて掘ってしまうと後世の人たちが検証できないことから、半分だけ掘削しています。



写真8 北曲輪の空堀

黄色のローム層を掘り込んで造られていますが、土層堆積の観察から、一度埋め戻された後に、もう一度掘りこまれていることがわかりました。

## 発掘調査成果 4：◆ 武田氏・徳川氏による城郭の巨大化

16世紀中葉には城郭としての体裁が整った興国寺城は、戦国の動乱が激化する中で、更なる改変が行われます。特にこの段階における重要な防御施設に「丸馬出まるうまだし」があります。丸馬出は三日月堀と土塁、そして空堀で構成される防御施設であり、本丸虎口こぐちと北曲輪虎口（現在は新幹線で滅失）の南北2か所で検出されました。これが造られたのは、本丸三日月堀の出土遺物から16世紀後半であると考えられます。丸馬出は武田氏が造る城郭に多く見られる施設であり、16世紀後半とはまさに武田氏が興国寺城を治めていた時期と重なることから、この発見は武田氏が侵攻先でも丸馬出を作っていたことを示す貴重な成果と言えます。

しかし本丸の丸馬出は、武田氏が滅んだ後に完全に破却されて造り替えが行われます。三日月堀の土層堆積を確認すると、本丸側に存在した土塁を壊して一気に埋め戻していることがわかりますが、破却した土の中からは多量の遺物が出土したにも関わら

ず、1点たりとも16世紀末の遺物は出土しませんでした。つまり三日月堀は16世紀末以前に壊されたものと考えられ、本丸虎口、すなわち「本丸の出入り口」という城にとって極めて重要かつ権威を示すような場所の造り替えが16世紀後半以降～末以前に起こっているのです。

16世紀後半以降～末以前の改変はこれだけではありません。丸馬出を構成していた空堀も深さは浅くなるものの、幅はそれまでよりも倍以上広がっています。またこれまで城郭の防御施設がみられなかった三ノ丸でも土塁や堀が造られるようになり、急速に城の要害化が進行する様子が発掘調査で明らかになりました。16世紀後半以降～末以前は、北条氏・武田氏・徳川氏との争いから始まり、さらには豊臣秀吉による小田原攻略（1590年）と重なる時期であり、このような城郭の巨大化とさらなる要害化は16世紀後半から始まる情勢と関連して理解されます。



写真9 本丸三日月堀全景（北から撮影）



写真11 三ノ丸土塁の断ち割り状況



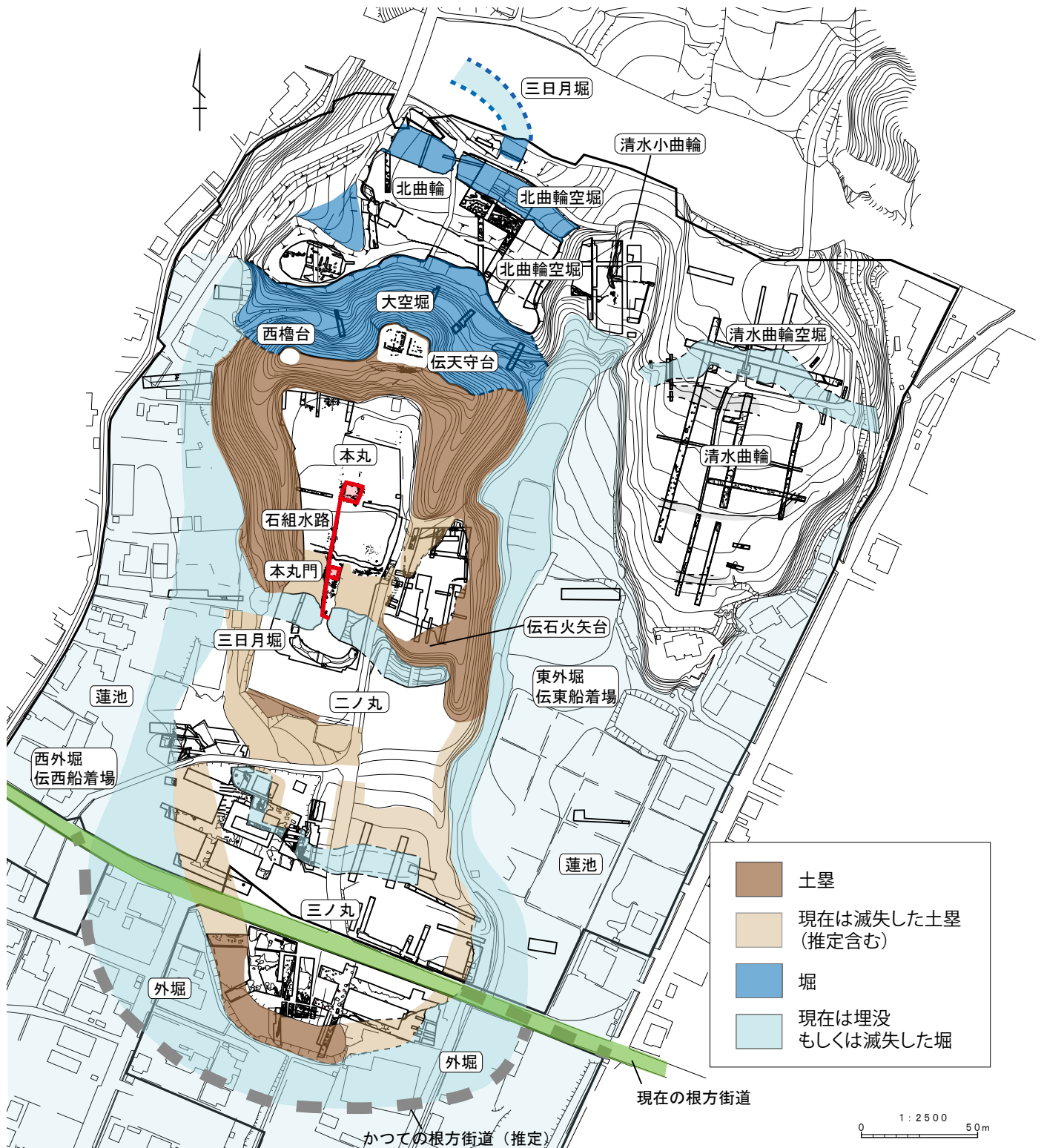
写真10 本丸三日月堀とそれを埋める土層堆積

三日月堀の堀底は幅が狭くV字の形をしています。また土層の観察から人為的に破棄されたことがわかります。



写真12 北曲輪北端を守る空堀

16世紀後半ごろに造り替えが行われたと考えられ、この時、堀の最大幅は13mまで広がりました。



第6図 発掘調査にて判明した城郭最終段階における興国寺城の諸施設

## 発掘調査成果5：近世城郭への志向と廃城

北条氏が滅び、豊臣秀吉による天下統一が達成されると、それまで興国寺城を治めていた徳川氏は関東へ転封となり、代わって駿河国を治めたのは豊臣氏の重臣である中村一氏でした。一氏自身は駿府に居を構え、弟の一栄を沼津三枚橋城に、家臣の河毛重次を興国寺城に配してこの地を支配しました。さらに関ヶ原

の戦い以後には徳川氏家臣の天野康景が最後の城主として入城しています。

興国寺城では河毛・天野段階で大規模な普請が行われました。本丸には礎石を伴う大型の門と石組水路を備えたうえ、その奥には石垣や天守台とその両翼に櫓台、さらには背後に大空堀を設けるような大改修で



写真 13 本丸を囲む大土塁



写真 16 伝天守台の建物礎石



写真 14 本丸礎石門跡と石組水路



写真 17 伝天守台石垣



写真 15 本丸石組水路



写真 18 伝天守台の北側に掘られた大空堀

す。これはいわゆる近世城郭のような形態への城の造り替えといえます。

ただしこの改修は河毛によるものか、最後の城主である徳川氏家臣の天野康景によるものであるかは出土遺物からでは明らかにできません。もしかしたら河毛の工事を引き継いで天野が最終的な姿へと完成させたかもしれませんが、16世紀末以降に少なくともこれまでの実戦的な戦国時代の城郭から支配者が

居住する近世城郭へとその姿を変えようとしていたことは確実です。

ただここで「変えよう」と記載したのは理由があります。最後の城主である天野は志半ばで城を捨てて出奔してしまうからです。彼が描いていた城の姿が今の興国寺城であるかはわかりませんが、激動の戦国時代を通じて、幾度となく改修を受けた興国寺城はこうしてその最後を迎えたのです。





興国寺城跡伝西櫓台から駿河湾を望む



沼津市文化振興課公式 FB

～東国における戦国時代の幕明け～  
**興国寺城跡**

発行 令和元年9月10日

編集 沼津市教育委員会

TEL 055-935-5010

